



アメのように折り曲って崩壊した銀座アーケード



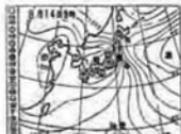
倒壊はまぬがれたものの立っているのが精一ばいの善光寺

県内はもちろん日本で
も有数の大建築である善
光寺の本堂は、昭和34年8
月の7号台風によって大き
な痛手をこうむった。幸
い修理工事中のことであ
り、足場などが組み立て
られていたためか倒壊は
まぬがれたが、山門はみ
なげもなく壊れ落ちた。
国の重要文化財・善光
寺本堂と山門は、その後
修復され、いま、緑の風
の中でその偉容を誇って
いる。

昭和34年8月の7号台
風、続いて同年9月の伊
勢湾台風（15号）によ
り市民がしばらく忘れ
かけていた災害の恐ろ
しさをまざまざと教え
られた。本市だけでも
死者5人、家屋の全・半
壊2,111件、床上・床下
浸水1,715件を数える7
号台風の被害に加え伊
勢湾台風も猛威をふる
い、両台風あわせて県
下の被害は死傷者1,004
人、400億円に達した。



七号台風のつめ跡、相川地内の農家



七号台風のとときの天気図

台風七号 善光寺さんも傾いた

甲府の災害



甲運地内の被害状況



甲運橋流失 四方を濁流に囲まれた石和町民に、鉄線を架け、滑車で医師を送り、食糧、衣類などを運んだ。



旧山城村

明治40年 大水害

明治40年8月21日から25日まで5日間も降り続いた豪雨は、甲府で315^{mm}、「を記録（甲府の8月の平均雨量は156^{mm}）。県内の大小河川のすべてが氾濫し、死者232人、壊されたり流された家屋は1万2,000戸にも達した。峡東の一部は特に被害が大きく、石和付近では苗吹川がその川筋を変えてしまったほどのすさまじさであった。



台風一過、全壊したわが家を無念の思いで片づける人たち（高畑地内）

「災害は忘れたころにやってくる」というが、明治期には水害に関するかぎり、忘れどころか毎年のように災害に見舞われている。明治期だけでも記録に残る水害は35回にもおよんでいる。明治31年には苗吹川堤防が決壊、高橋・七沢両村は一大湖水となり、39年には荒川三ツ水門の堤防が決壊、太田町以南は水深7尺(2メートル強)に達し、緊急給食をしたほどである。また40年には、甲運、国玉、高橋方面が、43年には市の南西部および東部でも濁川、藤川が氾濫し、市民は辛苦をなめた。

大正年間から昭和初年は比較的大きな水害はなかったものの、昭和10年には490^{mm}に達する豪雨があり、山宮、千塚、池田方面での被害は大きく、太平洋戦争の発生などで復旧工事もはかどらず、災害が即生活苦にもつなげた。

戦災復興のための乱伐によって戦後も昭和21年を除き毎年水害をこうむってきた。



7号台風一過のあと、直ちに災害対策本部を編成、被災者の収容、食料、衣料の配布、河川堤防の措置、応急仮設住宅設置計画をたて全市をあげて復興に取り組みこの難局をのりこえた。



まっ二つに折れた竜雲橋

それは、まさに真夏の夜の悪夢であった。甲府を突然襲った集中豪雨は、わずか2時間半あまりの間に北部山岳地で、400^{mm}を超える雨量となった。相川の氾濫による被害は想像以上に大きく、横沢町(朝日3丁目)付近の民家は10日余りも泥にうずもれたままであった。

死傷者58人。家屋全壊25棟。床上浸水1,486棟。被害総額は43億7千万円であった。



甲府集
田中加ノ申之若器

明治43年の大洪水

明治43年8月、甲府を襲った大洪水は、荒川にかかる荒川橋、飯豊橋、千秋橋を押し流し、相川も飯田橋付近で決壊、その濁流が市内に流れこみ一面の海と化した。特に甲府南西部の被害が大きく、春日小学校、遠光寺などが避難所となり救護にあたり多くの人命を救った。甲府市の全戸数の3分の1が床上、床下浸水の被害をこうむった。



泉町(相生一丁目)の浸水の惨状

復旧作業

復旧作業は、特別出動の自衛隊をはじめ、県や消防団、次々回、学生、生徒、市の全職員などあらゆる団体、機関が、復旧作業に精を出した。

